

〈小説と現実が入りまじり…〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

恋を恋する女――十九世紀仏作家

ギユスターブ・フローベールの長編小説『ボヴァリー夫人』のヒロインはそう呼ばれている。片田舎に住む若妻エマ・ボヴァリーが、平凡な結婚生活に飽き、不倫と借金を重ねた末に追い詰められて服毒自殺をするまでの悲劇だ。フロール自身「ボヴァリー夫人は私だ」という言葉もよく知られているが、米作家サマセット・モームはこの小説を世界十大小説の一つに挙げ、これまでにジャン・ルノワール、ヴィンセント・ミネリ、クロード・シャブロール、アレキサンダー・ソクローロフら主に芸術派の監督が次々に映画化している。

本作は、小説の熱烈な読者であるパン屋を主人公に、勝手にヒロインのエマと現実の隣人の妻を同一視してあらぬ夢想に走る男の物語。原作の愛の悲劇を、コミカルな勘違いとロマンチズムの入り混じった軽やかで上品な、ひと味違

うラブ・コメディに仕上げたのは、女性監督アンヌ・フォンテーヌである。

フランス・ノルマンディ地方の美しい田園地帯にある小さな村。パン屋のマルタンはパリで十二年間出版社勤務の後に帰郷、この地で父親の店を継いだ。毎日の単調な暮らしの中で、文学だけが生き甲斐。とりわけ、ぼろぼろになるまで繰り返し愛読しているのが『ボヴァリー夫人』だ。

ある日、向かいの家に若いイギリス人夫婦が引っ越して来た。その名が、何と！ジェマとチャリー・ボヴァリーと知ったマルタンの驚き。美しいジェマ（頭文字のGを取ればエマだ）は、小説のエマさながらに奔放で、目が離せなくなる。ジェマはジェマで、マルタンの焼くパンのおいしさにすっかり虜になってしまう。言葉を交わし、親しくなるにつれて、マルタンの頭の中はジェマのことでいっぱい。パンをこねながら、ジェ

マとエマ、現実と小説が入りまじった妄想がとめどもなく膨らんでゆく。

だが、『ボヴァリー夫人』など読んだこともない現代っ子のジェマは、そんなことなどお構いなし。自分の好きなように人生を楽しもうとする。そこへまるでアポロンのような美青年エルヴェ登場。村の古い城に滞在して受験勉強中という結構なご身分。気分晴らしに村へ下りて来たところを一目で恋に落ちた。ジェマは、夫の目を盗んでエルヴェと密会を重ねる。その現場を目撃したマルタンは、仕事も手につかない。

このままではジェマはエマと同じ運命を辿るのではないか――思い悩む中年男の乱れに乱れる胸の内。見ているばかりではなく、至近距離で体温を感じる程度には接近できるうれしさ。平静を保とうとするが、それは無理……。恋するおじさんのかわいらしさが名優ファブリス・ルキーニの絶妙な表情から滲み出す。「あんなの、平凡なつまらない女よ」との妻の声も耳に入らないマルタンは、ある行動に出るのだが……。映画は、フローベールの小説を基にした英国のグラフィック・ノベルの映画化。ただし、あっと驚く結末には、賛否が分かれるだろう。

『ボヴァリー夫人とパン屋』

フランス映画 (99分)

監督：アンヌ・フォンテーヌ

出演：ファブリス・ルキーニ、ジェマ・アータートン、
ジェイソン・フレミング、ニールス・シュナイダー

公開中

© 2014 - Albertine Productions - Ciné@ - Gaumont - Cinéfrance 1888 - France 2 Cinéma - British Film Institute

